

知床の森から

平成7年10月
第39号



北見営林支局 ☎ 099-41 北海道斜里郡斜里町本町11番地
知床森林センター ☎ 01522-3-3009 FAX 01522-3-3160

“知床で紅葉の森を楽しむ”

知床の森林に思いをはせた人達が、北見市・網走市・斜里町・小清水町から21名応募し、10月12日行われた「第28回森林レクリエーション・in知床『紅葉の森で森林浴・自然観察』」に参加しました。当日は最高のトレッキング日和で、数日前から朝夕の気温低下で紅葉が一気に進み、イベントの舞台である自然観察教育林は秋一色に染まりました。男女比2:1の一行は、森の新鮮な空気を吸いながらの道を歩き、森や樹木の観察や風景を楽しみました。

昼休みはクマガラの滝を眺めながら、ホロベツ川の河原で暖かい陽射しを受けながらのんびりとくつろぎました。

午後からもコースは変化に富み、異なる林の相が次々と展開します。足元で落ち葉が乾いた音をたて、ときおりシジュウカラのなき声が聞きました。小休止やスナップ写真を撮り、インストラクターの話を聴きまぜ、一行は所定のコースを回りました。初参加者15名を含むみなさんは、好天に恵まれ秋の知床の森を堪能したことと思います。



自然に学ぶ

保安林の働きと、環境に適応した植物を観察する「第8回森林教室『森とのふれあい』」は、9月10日(日)オホーツク海沿岸の潮音防備保安林と、知床五湖で行いました。

参加者は北見市・網走市・小清水町・斜里町から12名で、女性が8割を占めました。午前中は保安林が主体で、海岸線からどのような植物が生え、内陸部に向かってどのような植物が出現し、樹木の発生と林になっていく過程を目のあたりにしました。湖風から耕地を守る帯状の林は今も健在です。

午後からは厳しい自然環境の中で、健康に生きながら林を形造っている樹木群が、湖水とあいまって造る景観、そしてその環境下で生存する多くの生物種を知りました。今年はこの一帯にヒクマガイ徘徊し警戒対策が講じられていました。イベントは一日中好天に恵まれ快適に行えました。帰途湖上を開始しているマスや、その中に混じるサケを見物し今日のイベントの終了としました。



丸太切りに / 木工ペイント / 秋晴れのもと 好記録 / 大好評 / 盛会だった第16回知床産業まつり

これ以上留むべきもない好天に恵まれた第16回しれとこ産業まつりは、10月1日(日)役場横の大広場で行われました。多くのテント出店では趣向をこらし、地元産品の紹介や食品類が売られ、合せて実施されるイベントで活況を呈し、近在からの見物客も含め会場は大賑わいでした。

正面舞台から向き合うように立てられた知床森林センターのテントでは、こども丸太早切り大会の場소가確保され、テント横では知床の景観と森林植物(花)の写真パネルが架台に張られました。

テントの中では木工ペイントの場소가しつらえています。緑の法被のセンター職員は大忙しで、こどもの丸太早切り大会が始まると多忙さがピークに達しました。

直径10センチのハンノキの小丸太を、なんと13秒で切落としたあどけない女の子には、見ていた多くの人たちもア然の態。息をつめて一気に切ったものです。最初から人気のあったのが木工ペイントでした。輪切り木片に小皿・ペイントで絵を書き、誰ぞ小あなをあけて飾り紐を通して出来上がり。こどもを対象にしたのですが、ワシもしたいという老婦人もいて好評。限りなく素朴な手作業がこのようにウケるとは意外でした。なお毎年実施していたキノコ類の展示は、今秋不作につき中止、残念がられました。



円形窪地の利用者

自然観察教育林に向かう途中にボンホロ沼がある。水が涸れると草原となり、エソシロネとヒメシダの群落が出現する。この沼に二つの真ん丸い窪地がある。直径約3m深さ約1m、約2m深さ約70cm位で、周囲にヒラギシグガ、メドツサの叢のように生い茂っている。

どうしてこの窪地ができたのかを含め、疑問も多く質問もまた多い。ただ岩やガスの噴出でないことは、穴の縁に盛り上がった堅い噴出堆積物がない点から明らか。

食べ物の乏しくなった秋、エソシカが実をつけたこのスグをきれいに平らげ、穴の底を蹄で掻いている。一層の掃除で、これで穴が埋まらない理由が判明。ではなぜシカはこの穴に入るのか、水の匂い? 泥浴び? 気まぐれ? 明快な回答はない。

はっきりいえることは、この二つの窪地は涸れる沼から集まって来るエソアカガエルのオタマジャクシの最後の待避所であり、エソシカの立ち寄り所であるということです。知床半島にも説明のつかないものがまだあるのです。

(*知床にはラウススグがあり再度精査の必要がある)



野生の国の キタキツネ



自ら野生の道を選んだキタキツネ。束縛のない自由の代償は影のように付きまとう空腹であろうか。

しかし野生を享受し孤高に生きる者だけに備わる逞しさ、美しさ。深まる秋の陽をはね返して金色の毛並みがふつくと丸い。まさに自然児である。

ひきかえ、枯れ葉が転がる観光客の途絶えた路上に、悄然と首を垂れている瘦せた観光狐。人間に媚びを売った安易な生き方の当然すぎる帰結。これから体力を付けれるのだろうか。そして過酷な冬が越せるのだろうか。たくましさをこそ野生の象徴なのに。この両面顔は人間の干渉の有無として好比較といえる。

人間に汚染されたキタキツネは哀れであり、ゆえにこそ有識者は折える…餌をやらぬと。

知床半島には本当の野生の生命がきらめき、躍動に目を見張る場面こそふさわしい。